

蒼ざめた馬を見よ

五木寛之



冥府その後にしたがえり

ヨハネの黙示録 第六章より

五木寛之

文藝春秋

蒼ざめた馬を見よ

著者略歴 1932年(昭和7年)9月福岡県に生まれる。52年早稲田大学露文科に入学、57年まで在籍。その後業界紙編集者、ルポライターなど多くの職業をへて66年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、67年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を受賞した。

蒼ざめた馬を見よ

一九六七年 四月十五日 初版
一九七五年 三月一日 改訂第一刷

著者 五木 寛之
ひろき ゆき

発行者 檜原 雅春
はるな まさる

発行所 株式会社 文藝春秋
ぶんぎしゅしや

〒102 東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局一二二一

印刷所 大日本印刷
製本所 加藤製本

*万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

目次

蒼ざめた馬を見よ

5

夏の怖れ

93

赤い広場の女

129

弔いのバラード

153

天使の墓場

189

蒼ざめた馬を見よ

装幀 宇野亜喜良

蒼ざめた馬を見よ

その部屋にいたのは、三人だけだった。

Q新聞論説主幹の森村洋一郎、同じ社の花田外信部長、そして外信部記者、鷹野隆介の三人である。

Q新聞東京本社七階の、この特別応接室は贅沢なホテルの一室に似ていた。Q新聞に入社して十年ちかくたつ鷹野も、この部屋にはいったのは、今日がはじめてだった。靴の下には、ベージュ色の上質のカーペットの吸いこまれるような感触がある。磨きあげられたガラス壁面を通して、初夏の切れ味のよい陽射しが降りそそいでいた。目の下の西銀座の雑踏が別世界のようだ。密閉された部屋の中はひどく静かだった。快適な室温と、ゆったりとした空間。論説主幹のくゆらすパイプ煙草の匂いと壁の梅原龍三郎の油絵。鉢植えのゴムの木の艶やかな葉がかすかに揺れてい

る。

「組合のほうは相変らず忙しいのですか」

と森村論説主幹が、鷹野に向って微笑しながらきいた。一見、どこかの大学の教授か、地方の名家出身で長く外国に住んでいた美術評論家といった感じの、上品な初老の紳士だ。実際にアメリカで研究生生活を送った経歴があり、プリンストン大学の博士号を持っているという話を、鷹野はいつか聞いたことがある。繊細な風貌と女性的な物腰にも似ず、筆を取るとなかなか骨っぽいものを書く男だった。

「ええ。まあ——」

と、鷹野はあいまいにうなずいて答えた。「ぼく自身は春の役員定期改選で機関紙部長を降りましたのでね。以前ほどじゃありません」

「ふむ」

と、論説主幹はパイプを口からはなして微笑を消すと、じっと鷹野をみつめた。「それは結構なところで今日あなたに来ていただいたのは、ある特別な相談があったからです。それも、極秘のね」

「極秘ですって？」

鷹野は、さっきから黙って天井を見あげている隣の花田部長を振り返った。外信部長は、腕組みをしたまま、まあ黙って話を聞けというように、がっしりした顎をしゃくってみせた。彼は外

信部長というポストよりも、むしろ運動部長のほうが似合いそうな、体格の良い無口な男である。今日も出社した鷹野に、「ちょっと」と声をかけたただで、黙ってこの部屋に連れてきたのだった。

「相談というのは――」

と、論説主幹は軽い咳をして、さりげない口調で続けた。

「実は、あなたに、この社をやめてもらえまいか、ということなんですがね」

鷹野は一瞬、相手の言葉が信じられないというように顔をあげた。論説主幹は、それを無視して言葉を続けた。女性的な口調のくせに、どこかに押しつけがましい感じのする話し方だった。

「あなたが機関紙部長を退いたのは、一般組合員からの投書の扱いについて役員たちと意見の対立があったからだと聞いています。実際にそうなんですか？」

鷹野は答えなかった。論説主幹は言葉を続けた。

「あなたは、そのとき、言論は無条件で自由でなければならん、と強硬に主張されたそうだ。たとえ組合の機関紙であろうと、批判の自由は犯すべきではない、もしそれが真面目な意見なら指導部を批判する立場の投書も掲載すべきだ、と」

「ええ。まあ、そんなところです」

「今でもその考えは変わりませんか？」

論説主幹は、澄んだ褐色の目でじっと鷹野をみつめた。部屋の中に短い沈黙が漂った。

「――変えろとおっしゃるんですか？」

と、鷹野は皮肉な口調で言った。「O新聞の良心といわれるあなたが」

「それじゃ答にならない。どうなんですか？」

「変りませんとも」

「結構です」

と、論説主幹は満足気にうなずいた。「言論と批判は、常に自由であるべきだ。いかなる体制のもとにあろうとも、いかなる時代においても、だ。私はそう信じています。あなたが私と同じ信念をかたくなに守っていることを知って、私はうれしい」

鷹野は眉をひそめてきき返した。

「さっきはたしか、ぼくに社をやめろと――」

「そう。だが、それは命令ではありません。希望、もしくは依頼といったぐいのです。だから相談、と言ったでしょう」

「ぼくに社をやめてどうしろとおっしゃるんです」

「レニングラードへ行っていたください」

「レニングラード？ レニングラードへ一体なにをしに――」

「まあ待て」

と、花田外信部長が、横から無愛想な声で、鷹野の不思議そうな口調をさえぎった。

「社をやめろったって放りだそうというわけじゃない。仕事が終われば出版なりテレビなりで、ちゃんと拾ってやる。ただ、しばらく形式的にQ新聞と無関係な人間になれということだよ。わかるか」

「わかりませんね」

「説明しましょう」

と、論説主幹が言った。彼は安楽椅子から手をのばすと、社名入りの紙袋から厚い角封筒を取り出した。

「その前にお断りしておきますけど、もしあなたがこの仕事をOKしなかった場合は、今日の話の内容は完全に忘れてしまつて欲しい。これは絶対にです。でないと、あなたは一人の世界的な文学者を大変危険な運命に追いこむことになるかもしれないと限りませんのでね。ご了解願えますか？」

「ぼくには何のことかよくわかりません。でも喋るなど言われた事は黙っていきましょう」

鷹野は目をあげて、うなずいてみせた。論説主幹が冗談を言っているのではないことが、その硬い表情から読みとれたからである。

論説主幹は、ピアニストのような華奢な指先で、封筒から厚味のある書簡箋を抜きだすと、鷹野の目の前に差し出した。そしてやや低い声で囁くように言った。

「これは、ある高名なロシア文学者から、私個人にあてた手紙です。その人が誰か、ということ

今は言えません。だが、私が最も尊敬しているわが国の知識人の一人だとだけ言っておきましよう。つまり、ここに書かれていることは全面的に信頼できるということです。読んでごらん下さい」

論説主幹はそれだけ言うと、再びパイプをくわえ、ゆったりと椅子に坐りなおした。外信部長も煙草を取りだして火をつけた。なにか芝居じみてる、と、鷹野は頭の端で思った。だが、次第に体の奥であの厄介な好奇心というやつが、沼地の底にひそんでいる怪魚の尾びれのようにうごめきはじめるのを彼は覚えた。

鷹野は二人にみつめられながら便箋をひろげ、達筆で書かれた文章に目を走らせた。その手紙は最初の一枚が除かれ、二枚目からはじまっている。読みすすむうちに、鷹野は自分が次第にその手紙の内容に引きこまれて行くのを感じた。それは一種の転落感に似ていた。
へだめだ。まずいことになる」

彼は心の中で呟いた。それは彼の少年時代からの逆らうことのできない性癖だった。アキレスの踵みたいなものだ。何かふっと惹かれるものを覚えると、もう前後のみさかいなくどっぷりと全身でのめりこんでしまう。組合活動にしてもそうだった。自分が政治的人間と全く反対のタイプの文学青年であることを知っていながら、ひよっとした衝動からその中のめりこんで行ったのだ。今、その手紙を読みだしたとたんに、その不吉な予感が運命的な重さで彼をおそったのである。

へおれは何か厄介な仕事とかかわりあうことになる。きつとそうだ——」

鷹野は論説主幹と外信部長の鋭い視線を皮膚の上に痛いほど感じながら、逆らうことのできない罫の中へ、じわじわと落ちこんで行った。その手紙には、ジャーナリストの本能をそそる危険な匂いがあった。

〈森村洋一郎宛の私信・二枚目より〉

——かも知れません。さて、本題に入る前にお断りしておきますが、これは貴兄への依頼でもなければ、〇〇不明でもありません。外国文学紹介を業として生きて来た一老翻訳者の個人的な懺悔と受け取っていただきたい。前述のように、小生の余命は今や、長くとも今年の秋までもてば良い方だと思われます。友人のT大医学部長は、率直に私の病いがガンであることを語ってくれました。この期に及んで自己が為すべきこと、そして能う限りの残務は片づけておくべきだと考えております。幸いにして妻も子も持たぬ老書生ゆえ、家庭に後顧こうごの憂いはなく、債務もありません。学界においては偏狭といわれ偏屈者と嘲笑されておる小生ですが、仕事の面ではいささかの自負をもって死ねます。だが、小生の生涯において唯一つ、自責の念を抱かずして想起できない記憶が残っておるのです。この事実を知るのは、わが国においては私一人のみであります。否、彼の国においても果して何人が知り得ているか、恐らく当人とその夫人以外には絶対の秘密が守られているのではないかと推察されます。小生は偶然、その事実を確

認して、その背後の余りに重い問題におびえ、外国文学紹介者としての責任を放棄しさったのでした。小生は御承知の如く、露西亞文学の翻訳・紹介を生涯の道として選んだ者です。周知の通り、露西亞文学は自由と民衆への燃ゆるが如き熱情によって彩られてきた誇り高き精神の所産であります。ブーシキン、ネクラソフ、レールモントフをはじめとし、十九世紀の巨人たちから、マヤコフスキイやショロホフを経て、現代ソヴェートの若き群像、ソルジェニツィン、アクシヨノフらにいたるまで、一貫して脈打っておるのは、自由への希求と民衆への愛、そして真実の為にはシベリア流刑をもいとわぬ激しいパッションです。この文学の翻訳・紹介を業とする者は、その精神をわがものとし、彼等の叫びをわが叫びとしなければならぬ事は、自明の理でありましょう。小生も五十年にわたる文筆生活において、その志を忘れず、節を屈せず生きて参りました。だが、唯一つ、自ら恥じる記憶が古いかさぶたのように胸中にこびりついて離れません。小生が世を去ればこの事実は暗黒の中に忘れ去られてしまうでしょう。小生は、日頃尊敬する貴兄に、この事実を伝え、次代への証言者としてバトン・タッチしておきたい。貴兄の友情に甘えて、この手紙をしたためる事を決意したゆえんです。

今から三年前になりますが、小生は招かれてソ連を訪れ、モスクワ、レニングラード、コーカサスなど、各地を旅行致しました。時は白夜の候、インツォーリストの好青年の献身的なサービスマもあって、それは忘れる事の出来ない懐かしい旅となりました。たてこんだ日程の中で、或る日、旅行社インツォーリストのスケジュールの為か、半日ほどのブランクが生じたのです。小生はソチの街で